

会議録

進行 浅田教頭

記録 池永

議題 平成23年度 第1回 学校協議会

開催日時 平成23年7月23日 午後4時

開催場所 本校 応接室

出席者 〔委員〕 浅野委員 入江委員 柿原委員 北浦委員

芝井委員 立石委員 永田委員

〔学校〕 松本（校長） 浅田（教頭） 梅谷（事務長）

山本（首席・学校運営室長） 高田（学習指導室長）

1. 委員委嘱・紹介

前年度に引き続き8名の委員が紹介され、委嘱状が渡された。

2. 事務局の紹介

浅田教頭以下6名の本校事務局員が紹介された。

3. 学校長挨拶

学校長より、本会の趣旨目的についての説明があり、本年度の協議課題の重点についての諮問があった。

4. 座長選出（座長あいさつ）

本校 PTA 現会長 北浦義己委員を選出した。

5. 報告・協議

（1）学校から報告

「槻の木高校の次の10年を見据えて」 報告者：松本校長、山本首席

山本 来年度には槻の木高校は十周年を迎えるが、これからの十年間を見据えて、変えるべき事、変えてはならないこと（例えば伝統など）を精査したい。委員の方々に組織人として、以下の各項目について、良き提言を頂きたい。

① 教育の4本柱について

本校は創立当初より、4本の柱となる教育目標を設定し取り組んできたが、「規範意識の確立」、「学習活動の重視」、「自主自立精神の育成」の3本柱と、「国際理解教育の推進」には違いがあるように思える。本校はオーストラリア、タイ、韓国のそれぞれの高校と姉妹校提携を結び、交流を行っているが、一昨年はインフルエンザ、今年に入ってからオーストラリアの洪水や東北関東大震災の影響で、事実上、交流が滞っている。実情に即したように、「国際理解教育の推進」を「国際的視野を取り入れた社会貢献」に変更するなどの改善も含め考えていきたい。

② 厳しさの追求

1, 2年生の進路希望調査表にある、アンケート結果が示すとおり、1年生は平均で家庭学習が20分増加した。2年生は1年次より学習時間の減少が見られない。2年生のこの時期に学習時間が落ち込む一般的な高校生の実情を考えると、これは驚くべき結果である。一部の生徒からは「課題が多すぎる」と反発の声も聞くが、真の厳しさを追求し、それを乗り越えたところに成長があると考えている。

③ 学校の組織形態について

本校は「学校運営室」、「学習指導室」、「生活指導室」、「学年室」の4室制をとっているが、「教科室」の導入に関して、助言を頂きたい。本校は現在、校務分掌を中心に組織作りをしている。これから益々多くの新採用の先生方が増えると、教科力の増強が必要不可欠であると思われる。「教科室」を置くと同時に、若い先生方の教科指導力の育成に取り組みたい。

④ 学習サポート

本校は生徒の学力向上を目指し、学習到達度が中位にある生徒には宿題や講習で対応し、学習到達度の低い生徒は指名して自習活動を行っているが、学習到達度の高い生徒に対するサポートは十分とは言えない。

⑤ 「槻の木らしさ」の追求

6月27日に橋下知事が来校され、7時40分から学校長と共に朝のあいさつ運動に参加された。知事も生徒の礼儀正しさに感動され、早朝の活動に、「槻の木らしさ」を垣間見られた。

「変化とは唯一の永遠だ」という言葉があるが、学校は変化を求める集合体であるべきで、「停滞は後退」であることを心に刻み、取り組みたい。

松本校長

資料の中の「本校における教育活動の変遷」という項目に本校創立当初からの取り組みをまとめた。成果がデータにうらづけられている。

今年の体育大会を終えた1年生の感想の中に「先輩達の真剣な姿に感動した。」という部分があり、「いつか自分もそんな先輩になるんだ」という意気込みが感じられた。そんな生徒の思いの中から「伝統」は育まれていくのであろう。

槻の木高校で地域の方々が共に学べるよう、第一回「槻の木 MANABI カフェ」を8月21日に開催する。前高槻市長の奥本務氏をゲストとして迎える。

本日ご欠席の宮坂委員から「皆様に宜しくお伝え下さい。」という伝言をあげなかった。また、教科力とともに各教科の横の連携は重要で、バランス良く講習などの教育活動が行えれば良いと提言された。

本校では「大阪府立高等学校説明会」で小学生、中学生と保護者に公立高校のあり方を説明しているが、小学校、中学校、高校、大学での学びの連携の重要性を感じている。

(2) 協議

芝井委員

組織形態について、現在の4室は優れている。「教科室」という考えは旧来の学校が取っている形態であり、若手育成には効果的だが、教科を聖域化する傾向がある。

浅野委員

やはり、「教科室」設置はパンドラの箱という懸念が払拭できない。教科中心という形態は落ち着いた学校では有効であるが、生徒が不安定になれば非常に脆い形態である。今、流行の「ドラッカーのマネジメント」にも述べられているが、

「マネジメントとは顧客の創造」であり、生徒と保護者にとって望まれる学校作りを目指すべきである。

教育の 3 本柱に関して、「規範意識の確立」、「学習活動の重視」、「自主性の育成」は学校の本業だが、「国際理解の推進」は別物であり、「社会貢献」に置き換えることも可能ではなかろうか。

教頭

槻の木高校が出来る際、高校の再編と統合があり、「国際理解」は母体校の取り組みに由来しており、3 本柱とは位置付けに違いがあり、牽引者を育てることが難しいのも事実である。

永田委員

「教科室」という考えについて、職場（塾）では教科房という名前を用いているが、教科が強すぎれば一方向に走ってしまう傾向は否めない。教科房の主任は研修・教材を総括し、人材課長としての役割を果たす。ミーティングでは教科の要望ばかり出る。学校経営を考えた場合、「教科室」という考えは難しい。

「国際理解」については、他の 3 本柱とは異なるので「キャリア教育推進」という項目にしてはどうか。

北浦委員

PTA でも国際委員会あるが、JICA から講師を招くなど、現在出来ることを模索してはどうか？Australia の修学旅行がなくなった時点で事実上、学校をあげての国際理解への取り組みは不可能になったと感じる。「国際理解」の旗は下ろさず、できることを考えたい。

「厳しさ」は生徒が萎縮するものであってはならない。本校の生徒は安定志向にあるので、進路目標を低目に出す傾向がある。高い目標を設定し、それに向かって頑張る逞しさが欲しい。「特進クラス」の設定しなど、生徒にとって良い刺激になることを考えてはどうか。

柿原委員

商工会議所の講演会で青色ダイオードの開発者、照明デザイナーの方、京大ダイオードの研究者、サニーレイクダイオードの開発者の意見を聞いたが、上海の工業団地には 2000 人以上の従業員がいる。日本の企業がグローバル化の鍵となるのは英語力以外の何物でも無い。特許を取る際、通訳を介したりしていたのでは、とても無理である。自分の子供も海外の大学を卒業したが、日本の企業でこれから活躍する人材を育成するため、真のキャリア教育は必要である。刺激を受ける良い機会として、「槻の木 MANABI カフェ」は良い考えだ。

芝井委員

「国際理解」について、海外修学旅行や姉妹校提携を実施している学校が多い。さらに踏み込み、地球市民として自己を確立し、資質、能力、技能を育成することが重要であり、新しい局面を開く必要性を感じる。

「規範意識」、「学習活動」、「自主自立」は理念であり、多くの府立高校がこの 3 つを完成できなかったから、槻の木高校が目指したのである。

これからの社会を見据え、MISSION を設定するため、議論が必要である。

入江委員

教育活動には「不易」と「流行」がある。変えるべきではないものが「不易」であり、時代に即して変化するものが「流行」である。「国際理解」は流行にはいり、変化することも十分にあり得る。

子どもの自己実現を考え、何が求められるか、社会には何が必要かを考え、「温故知新」に即し、教育目標を設定したい。

校長

「学年室」という発想は学年の差を作らないために設定した。「教科室」は教科の島を作り CORE 同士が連絡を取り、教科間のバランスを取る。教科室が教科を束ねるのである。

芝井委員

TRY AND ERROR、BUILD AND SCRAP で、試行錯誤を繰り返し、何事もやっ
て駄目なら、引くという姿勢も大切である。

私立はほとんどの学校が「特進」を持っているが、公立の出来る範囲において取
り組むことを提言する。

高田

生徒の希望進路を見る限り、安全志向とは思えない。上を狙う子が多い。本校は
毎年教育課程を変えており、対応も迅速である。また、室内の仕事も毎年変化し、
より機能的な組織作りを目指している。

6. 各委員よりの提言

浅野委員

槻の木高校は S 字カーブを抜けたところで、これからが攻めである。システムの
大幅な変化は抑えるべきである。生徒はよく勉強するが手を緩めては元に戻る。
環境整備を通じ、生徒がさらに頑張れるよう提言する。

入江先生

他の学校でよくある現象だが、学校が荒れる→教職員が結束する→安定する→教
職員が結束しなくなる。例えば研究指定校の時は良いが、次の年には元に戻ると
いったことがよく見受けられる。安定した盤石な組織作りが大切である。

8月1日から3日まで、槻の木高校の先生が高槻第一中学校に授業に来られるが、
これは大きな宣伝となる。高槻市内の中学校に広めてはどうか？

柿原委員

「高槻まつり」は今年で42回目を迎えるが、10年ごとに仕掛けを考え、企画
運営を行っている。槻の木高校もこれからの10年を考え、気を緩めず、しっか
りと歩んで欲しい。また、組織に関しては急速な変化ではなく、良い方向へ進化
することを望む。

北浦委員

PTA も 10 周年を迎える。子どもたちも満足している。保護者としても学校の価値観をさらに高めて欲しい。

芝井委員

校風・文化は自然発生的にじわっと出てくるものだ。槻の木高校は多くの公立高校のよくないところを再現しない学校としてできたのだから、原点を保持し、今の「姿勢」を大切にしたい。

立石委員

最近、「国際化」という名の付いた本が少なくなってきた。それは、国際化というものが当然であるようになってきたからであろう。これからは「日本人らしさ」を示して欲しい。今後、ますます「日本文化」を身につけた人が必要であるが、いかに「真の日本文化」を身につけるかが課題である。

永田委員

先ほどの生徒の作文にあったが、先輩が立派に思えるのは、自分が未熟であるからであり、また同時に先輩に社会的役割を担って欲しいという要求でもある。先輩へのあこがれを持つということは、良い傾向であり、生徒の自己実現への第一歩であり、校風がそこから生まれる。